

紹介

宝月圭吾先生還暦記念会編

日本社会経済史研究

宝月圭吾博士の還暦記念論文集が四七名

の多数の日本史研究者の論考を集めて三巻よりなる大部の研究書として刊行された。

宝月博士は東京大学ならびに史料編纂所における長い学究生活の間に、中世社会経済史の基礎的史料を博抄され、『中世灌漑史の研究』と『中世量制史の研究』に大成される数多くの学問的成果をもって中世史研究に多大の貢献をされた。とくに『中世灌漑史の研究』は、中世農業技術史に関する貴重なデータを網羅して、中世史研究者が必ず一度は典拠としてこれをひもとくべき古典的名著として、古島敏雄氏の『日本農業技術史』とともに今後もその価値は衰えないだろう。これにひき続き『中世量制史の研究』を上梓され、とくに柙に関する今日得られるすべての史料を集められ、後進の研究者としてはまことに重宝この上ない著作として広く利用されている。宝月博士が

これらの大業を成されたのは、博士の重厚・堅実な実証的研究の成果であるが、同時に東大史料編纂所というめぐまれた研究の場におられたこともあずかって力があるろう。ともかく博士の御仕事の影響力は大きく、そのことがこの『日本社会経済史研究』全三巻の偉容にもうかがえる。

『古代・中世編』は、長地・半折の前後関係を中心に条里制地割の実態を分析した弥永貞三「半折考」、束把制の消長の過程を論じた歌川学「稲束の制について」、壘田永世私財法のテキスト・クリティックをもとに同法の性格規定を行なった吉田孝「壘田永世私財法の変質」、小東庄の名編成の成立を中心に階層構成と収取機構を論じた稲垣泰彦「東大寺領小東庄の構成」、均等名荘園制論で把握しきれない畿内型荘園を「名田・間田」体制の概念で分析した島田次郎「畿内荘園における中世村落」、大番舎人の番水支配体制を扱った岡田隆夫「和泉国大鳥郷における開発と展開」、職の体系と封建制との関係を理論的に追究した永原慶二「荘園制における職の性格」、いわゆる「文治地頭」の性格を学説批判的に分析した安田元久「文治地頭」に関する省

察、鎌倉時代の守護領を各国について実態分析し国府近傍の国衙領と交通の要衝を基幹部分とする構造であることを実証し従来研究の盲点であった分野に展望を打ち出した石井進「鎌倉時代『守護領』研究序説」、讃岐国の御家人の分析と新補地頭・在庁官人との関係を実証した田中稔「讃岐国の地頭御家人について」、建治年間の地頭職分割の実態を歴史地理学の方法も援用して分析した井上鋭夫「奥山庄の復元的研究」、島津庄の在地領主の鎌倉末・南北朝初期の動向を追った五味克夫「救二院と救二郷」、豊後国大野庄志賀村の在地領主と在家農民を扱った佐川弘「名田・在家付田相関関係に関する一試論」、在地領主の所領構造を東国の諸史料について分析した菅田慶恩「東国地頭の在家支配について」、荘園制崩壊期に入る南北朝期に東寺領荘園が発展の頂点に達する条件を学衆方はじめ各方の成立と所職の一円化に求めた網野善彦「東寺学衆方荘園の成立」、東大寺における学侶の集団指導性の確立を論じた平岡定海「僧兵について」、善鸞事件を中心に関東の異端を論じた笠原一男「危機に立つ親鸞の念仏」、以上の一八の論文より成っ

ている。

『中世編』は、応永年間の神宮方・段銭京濟制度の成立を論じ段銭の制度史研究を深めた百瀬今朝雄「段銭考」、中世の各種裁判権の重層関係を法制史の上で追究した笠松宏至「中世在地裁判権の一考察」、武家裁判権の管轄と訴訟手続を分析した羽下徳彦「室町幕府初期検断小考」、評定・引付の所務相論の衰微と京都經濟圏の掌握の強化の中で京都の雑務公事を扱う政所の位置をクローズアップさせた桑山浩然「中期における室町幕府政所の構成と機能」、矢野庄の年貢散用状の「国下用」や「半分定」に注目して守護役関係費用の変化とこれをめぐる守護・荘園領主・地下の関係を論じた福田以久生「守護役考」、万里小路家領について請負代官制の推移を論じた新田英治「室町時代の公家領における代官請負に関する一考察」、保内商人の場合について各種専売権・本座権・流通路独占の関係と段階規定を行なった佐々木銀弥「座商人の独占について」、得珍保今堀郷の階層構成と物諸体制の展開を詳細に追跡した金本正之「中世後期に於ける近江の農村」、中世末の革島家の所領支配構造を分析した尾藤

さき子「畿内小領主の成立」、相良氏法度が郡中惣の法ともいべき性格をもち、所衆談合という一種の在地裁判権の上に相良氏の裁判権が存在していることを論じた勝俣鎮夫「相良氏法度についての一考察」、京都において地主的土地所有に対する町単位の共同体的土地所有の対抗・克服に近世の町人都市の成立を見る瀬田勝哉「近世都市成立史序説」、宝徳・享祿・天文の検地帳の分析によって上賀茂岡本卿の復元図を作成した須磨千穎「賀茂別雷神社境内諸郷田地の復元的研究」、以上の一二編である。最近研究が著しく進み出した室町幕府守護体制の制度的研究の先端を行く力稿が四編も並び注目される巻となっている。『近世編』は、次の諸論考が収められている。

を中心に—— 大野 瑞男
松本藩慶安検地の歴史的意義 金井 円
長州藩における家臣団形成過程 市村 佑一
寛文期の会津藩「半石半永」制運用政策 高木 昭作
転換 大口勇次郎
北信幕領における石代納 青木 孝寿
幕府領から私領への替地の諸問題——近世後期信濃椎谷領の場合—— 小村 正人
近世用水堰の經濟史的研究——八ヶ岳山麓開発を中心とした近世用水堰の研究—— 林目付の記録よりみた諏訪藩の山林政策 峯村 秀夫
藩流通構造の変化についての一考察 雨宮 由幾
——信州上田藩を素材として—— 小野 正雄
岡山藩における小倉織物の流通形態——嘉永・安永期を中心として—— 越後綿布生産地帯における地主経営 児玉彰三郎
——北魚沼郡西吉谷村石坂家の場合—— 一八世紀末における村方騒動と村落支配

——美濃における一村の分布——

伊藤 忠士

村方騒動と寄生地主——甲州水田地帯に

おける個別例—— 佐々木潤之介

生野の乱の史的背景——在地豪農の動向

を中心に—— 長倉 保

『古代、中世編』A5判 六一四頁 三、五〇

〇円 『中世編』A5判 四五四頁 二、八〇

〇円 『近世編』A5判 六二四頁 三、七〇

〇円 何れも昭和四二年一〇月 吉川弘文館刊

(村田修三)

兵庫県百年史

明治・府県制のはじまりから百年をむかえ、各府県で百年史の編纂がすすめられていくと聞くが、『兵庫県百年史』がいち早く上梓された。一、二四〇頁の大冊に、兵庫百年の歩みをぎっしりとつめこんだ、豊かな内容をもつ百年史である。武藤誠・今井林太郎・俵静夫・宮本又次氏ら研究者を交えた編纂委員会のもと、執筆者は、藤岡謙二郎・阿部真琴・木南弘・酒井一・岩

瀬昌登・前嶋雅光・蓮池義治・川端直正・稲本吉次・師岡祐行・堂面秋芳の諸氏である。

さて記述の内容であるが、明治前期・後期、大正期、昭和前期・後期と時代区分し、冒頭に兵庫県の地理的基盤を配している。明治前期は、幕末の政局と兵庫開港問題に

はじまり、王政復古、兵庫事務局・兵庫鎮台・兵庫裁判所の設置を経て慶応四年五月二十三日兵庫県設置初代知事伊藤博文任命、山陰山陽の鎮定と版籍奉還、廢藩置県と県の統合、地租改正、県機構と県財政の推移、殖産興業と近代産業の発足、神戸港の発展、教育の進展、ジャーナリズムの誕生と自由

民権運動、以上が前期である。後期は市町村制・府県制の実施による地方自治制度の確立を画期とし、県下の政党分野、農業技術の改良と農村経済の推移、漁業の発達、近代工業の確立、条約改正と神戸港の貿易、金融機関・交通通信機関の発達、日清日露の両戦役と軍備拡張、教育の普及、充実、文化の諸相にふれる。大正期は、地方自治の拡充と県財政、県下政党的動き、世界大戦と産業の躍進、神戸港貿易の躍進、米騒動と労働運動の高揚、農漁村の不況と小作

争議、戦後における産業の沈滞、戦後不況下の労働運動と普選運動、教育機関の拡充、災害と疫病、生治と文化と展開する。昭和前期は、金融恐慌にはじまり、産業界の不況、農漁村の疲弊、恐慌下の県財政、普選の実施と県政界、満州事変と産業界の活況、日華事変と戦時体制への移行、太平洋戦争の進展、戦時下の教育と昭和二十年にいたり、昭和後期は太平洋戦争の終結と戦後の混乱にはじまり、地方自治制度の改革、経済民主化政策と産業の復興、労働運動の展開、教育制度の刷新、産業の高度成長、公共事業と災害等を述べ、最後に県政の現状と将来方向、でしめくくっている。

以上、実のところ各章の見出しを中心に紹介したのであるが、各章何れも適切な表題がつけられているので、この百年の歩みをどのようにとらえ、何を記述しているかも、推測願えるかと思う次第である。地方自治制の沿革、県政界の動き、殖産興業にはじまり高度成長にいたる産業界の動向、学制から戦後のP.T.A.など社会教育の充実にいたる教育界の動き、自由民権運動・米騒動・小作争議など労働者農民の動向等々、この百年の主要な問題はすべて網